合併特別企画

新市「米原」の街道・宿場　— 絵図・地図 — 展　［山東町］

山東町・伊吹町・米原町は古くから交通の要衝として文化が開けてきました。この度新市「米原」への合併に向けての特別企画として、豊な文化をもたらした街道・宿場にスポットを当て、企画展や講演会を開催します。多くの方のご来場をお待ちしております。

期　　間　平成16年10月26日(火) から
11月28日(日) まで

場　　所　山東町立柏原宿歴史館

関連行事　☆講演会
11月７日(日) 午後１時から
・講演「古地図にみる　むら・まち・みち」
講師　岩間一水氏
（草津宿街道交流館）

問い合せ　柏原宿歴史館　（☎ 0749-57-8020）
〒521-0202 滋賀県坂田郡山東町柏原 2101

情報ＢＯＸ

◆滋賀県教育委員会・伊吹町教育委員会では、下記の冊子を発行しました。
『乱世を生き抜いた江北の雄
～京極氏の足跡を訪ねて～』（Ａ５版、28㌻）
※国史跡「京極氏遺跡」をはじめ、県内外の京極氏関連史跡を網羅したガイドマップです。

◆滋賀県教育委員会と伊吹・山東・米原各教育委員会では、下記の冊子を発行しました。
『西と東のせめぎ合うところ
～坂田の城・まち・山の寺』（Ａ５版、32㌻）

◆伊吹町教育委員会では、「京極氏遺跡」の国指定を記念して絵はがきを作成しました。内容は、上平寺城絵図・京極氏庭園跡・弥高寺跡・城下出土遺物の４枚１組です。

◆伊吹山文化資料館では、下記の冊子を刊行しました。
『伊吹山文化資料館年報６　平成15年度の活動』
※文科省「全国廃校リニューアル50選」の原動力、友の会の活動を紹介しています。

◆伊吹町春照太鼓踊り保存会では、下記の調査報告書を刊行されました。
『春照八幡神社太鼓踊り　附奴振り』
※滋賀県選択無形民俗文化財の歴史や芸態の調査報告と、伊吹山周辺の太鼓踊りについて論考。

◎問合せ先
伊吹山文科資料館　TEL0749-58-0252

◆◆編集後記◆◆

来年２月に「米原市」が誕生する手筈です■読み仮名は「まいばら」で、現町名の読み「まいはら」ではありません■西は琵琶湖岸に面し、東は岐阜県境の伊吹山地までの範囲です■伊吹の人は、琵琶湖をわが手にした！米原の人は、スキー場がある！山東の人は、両方手に入れた！■って喜んでいるかどうかは分かりませんが、新市域には、伊吹山と琵琶湖という、滋賀県のふたつのシンボルがあります■さて、今回の『佐加太』は「歴史と人権」の特集です。今年度の坂田郡の研究テーマに沿って紙面を構成しました■いろいろなアプローチから話題が広げられたらと思います。　（シャンギリっ子）

坂田郡文化財ニュース
佐　加　太　第 20 号
発　行　平成 16 年 10 月 15 日
編　集　坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局　〒521-0314　滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
TEL. 0749(58)1121
印　刷　立木印刷

坂田郡文化財ニュース
佐加太

第 20 号
２００４年10月15日
特集：歴史と人権
滋賀県坂田郡社会教育研究会
文　化　財　部　会

佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

戦争中の入江内湖干拓事業　［米原町］

ＪＲ米原駅より西側から琵琶湖の間に拡がる水田地帯には、かつて入江内湖という県下第二の面積を誇る内湖がありました。豊富な水産資源を有した入江内湖は古来より良好な漁業の場として利用されてきました。しかし、第二次世界大戦末期に食糧難に陥ったことで農地開発の機運が高まると、琵琶湖干拓事業の一環として入江内湖の干拓が昭和１９年から昭和２５年にかけて実施されました。

事業当初は戦時下で、働き盛りの男性のほとんどは戦場に、未婚の女性は軍需工場に動員されていたため、学徒動員や勤労奉仕によって進められました。学徒は県内だけでなく県外からも動員され、遠いところでは北海道からもありました。けれども、大戦末期という深刻な物資不足の中で、労働待遇は非常に悪かったようです。

滋賀県会の長野重右ェ門議員が提案した「琵琶湖干拓事業実施方法ニ関スル意見書」には、食糧、衣料の問題以外でも、冷たい水の中に入って終日働いているにもかかわらず、たき火にする薪やわらが手に入らないこと、宿舎には風呂や便所がないというところが多いことを指摘し、早急な措置を図るように求めています。この提案は県会において可決されたものの、戦争末期ということもあり、改善策はほとんど採られることはありませんでした。

干拓事業には学徒以外に戦争捕虜も労働力として用いられました。昭和20年５月、米原町梅ヶ原にあった農地開発営団事務所の南側に捕虜収容所が建てられ、捕虜が干拓事業に従事することとなりました。最近、明らかになったのですが、戦後にＢ２９が実施した最後の作戦が捕虜となった同胞を支援するため、食糧にパラシュートをつけて投下したとのことです。

敗戦後、事業の主力であった学徒や捕虜がいなくなり、代わって終戦で復員する者や新しい就職者が参加し、昭和２５年、入江内湖干拓はようやく完成しました。

そして現在、私たちは豊かな社会の中で生活しています。しかし、その陰には多くの人々の苦労があったことを忘れてはいけないと思います。

坂田郡のまつり　①

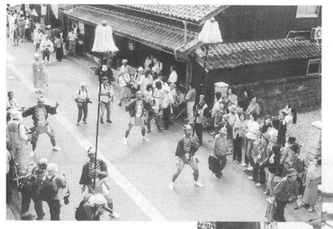
【県選択無形民俗文化財】春照太鼓踊り　附奴振り

［伊吹町］

八幡神社奉納の太鼓踊りは、江戸時代の寛文11年(1671)頃に、長期にわたる旱魃に苦しんだ農民がはじめたものと伝えられています。

奴振りを先頭に、菅笠をかぶり太鼓を胸にした踊り手、稚児のふくべ振りなどが長い列を作って、北国脇往還の宿場町の面影を残す区内を練り、八幡神社境内で囃子にあわせて太鼓を打ち鳴らしながら踊ります。行列に山伏が加わり、雨乞い祈願をするのも特徴です。

現在おこなわれている踊りは、豊作に対する返礼踊りで、五年に一度、秋祭りに踊られます。今年の９月23日におこなわれた踊りの様子を写真で紹介します。



女人禁制を物語る「手掛け岩」

［伊吹町］

「此山女人結界、この處まで村の婦女登るといへども嶺に上る事叶わず。昔一人の比丘尼おして登山して山の七分に登る時、震動雷電して死す。その時苦悩の余り巌に手をかく五の指の跡今に在り、手掛岩といふ」(『近江輿地志略』)。

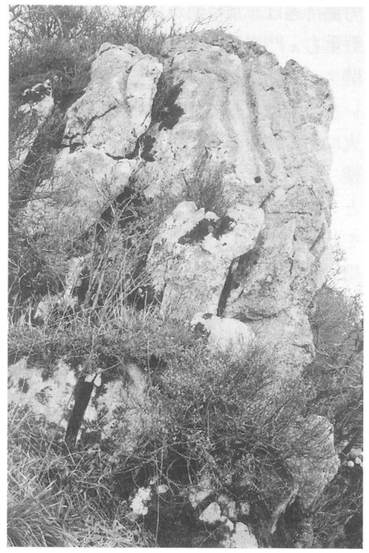
「此山」とは、近江と美濃の国境にそびえる修験道の山・伊吹山です。この話は、伊吹山がかつて女人禁制の山であったことを物語っています。女性は伊吹山に入った夫を求め、禁制の山にひそかに登りますが、山は容赦なく風雨を投げつけ、山肌からふるい落とそうとします。やがて岩肌も崩れよとばかり雷鳴がとどろき、一陣の風は、とうとう女性を岩から引き離して千刃の谷に投げ落としました。しがみついた女性の指跡は、ついに岩を削りとりました。登山道脇にある「手掛け岩」です。

伊吹山頂付近は石灰岩地のため、多くの奇岩・巨石が林立しています。地元で「蔦の岩」と呼ばれる巨岩も、結界を示し、かつて注連縄が張られていました。

明治５年、女人禁制撤廃の太政官布告が発令されました。このとき、ほとんどの山が禁制を解いでいます。

さて、女性に対する宗教的な不浄観から差別的な意味合いを帯びて語られる女人禁制ですが、日本では飛鳥時代以来、男性出家者が居住する僧寺と、女性出家者の尼寺が区別されてきました。僧寺は女人禁制、尼寺は男子禁制です。しかし、平安時代に女性の出家制限が始まり、尼寺が消滅して、女人禁制の僧寺のみが残りました。さらに、戒律を守るために寺院や霊場が、ことさら女人禁制を強調し、不浄観などの理由が補強されたという見解があります。もとは不淫戒という仏教の戒律から生じたものです。

（髙橋順之）



◀手掛岩

時の流れ・・・

［山東町］

山東町のほぼ中央に野鳥の楽園として有名な三島池があります。この池は、マガモの自然繁殖の南限地として、滋賀県の天然記念物に指定されています。

その周囲わずか780mの小さな三島池にはこんな伝説が残っています。

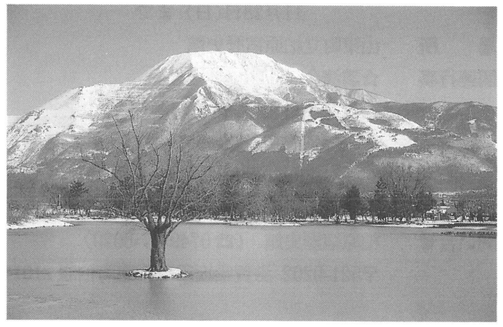
「その昔、佐々木秀義という代官がこの池を掘りましたが、水が出てきませんでした。占ってもらったところ、女性を生き埋めにすれば水が出るというお告げがありました。そこで、代官の乳母の比夜叉という女性を、はた織り機と共に池底に生き埋めにしたところたちまち水が溢れ出て、年中絶えることのない水で、毎年豊作が続いたのでした。」

今でも、深夜になるとはた織りの音が聞こえるといいます。また、池のほとりには比夜叉の墓があり訪れる人が絶えません。

この三島池に限らず、全国各地には多くの人柱伝説が残っていると思いますが、その人柱の多くが女性であったように思われます。その理由は定かではありませんが、当時の女性の立場を物語っているのかもしれません。

現代の女性の姿の一例として、中山道の宿場であった柏原宿を訪れる女性も多くなって来ています。

女性は家庭、男性は仕事という意識も変わりつつあり、女性ならではの感性と元気さは着実に現代社会を動かしています。"男女共同参画社会づくり"ということを言わなくてもいい時代がもうそこまで来ているのではないでしょうか。（桂田峰男）



日光寺の干柿つくり

［近江町］

近江町日光寺は、横山丘陵の南端裾に所在する山あいの小さなの集落。山裾にある２つの大きな溜め池から棚田に水を送る農村風景が近年までひろがっていました。

この集落では、江戸時代の中頃から大規模な干柿生産がおこなわれていました。干柿といえば、全国どこの地域にもあるものですが、日光寺では刈り取りの終わった水田に「柿屋：かきのや」と呼ばれる小屋が建てられることに特徴があります。

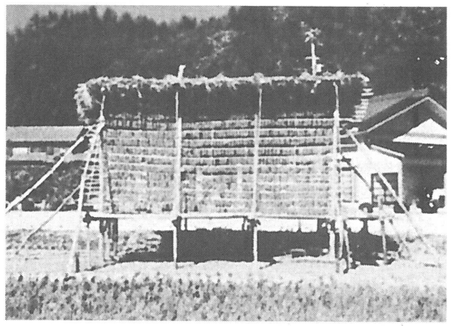
小屋は栗の木で組まれ、わら屋根が載せられます。高床式の構造ですが、壁は無く、中には何段にも竹のさおが組まれ、ここに振り分け状態の柿が２個１対で吊り下げられます。

柿は、むろん渋柿。朝早くから収穫されたものが、夕方になって集落内に持ち込まれました。柿をちぎり、かごに入れて、荷車で運ぶのは男性の仕事とされました。長浜・伊吹・山東・米原、近隣の広範囲な村から柿が集められたことが古文書からわかりました。

夕方、集落に持ち帰られた柿は、夜のうちに皮がむかれます。こちらは女性の仕事。近隣の集落から若い娘が働き手に集められました。

人間よりも道具の方が多いのが特徴。若い娘の仕事を手伝おうと、山を越えて他所の若者が加わるからです。良いところを見せようと、一生懸命に作業を手伝う男性の姿が目に浮かびます。

昭和30年代に姿を消した日光寺の干柿「あまんぼう」ですが、近年、地元の壮年グループによって毎年再現されるようになりました。（宮崎幹也）



▲柿　屋